

*The Sinfonietta*

# ザ・シンフォニエッタ

## 第25回演奏会

*25th Concert*

2011年10月10日(月・祝)

熊本県立劇場コンサートホール

開場 17:30 開演 18:00



指揮・ピアノ  
若林 颯

*Mozart*

*Schumann*

*Brahms*



主催：ザ・シンフォニエッタ 助成：(財)熊本県立劇場  
後援：熊本県 熊本県教育委員会 熊本市 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社  
NHK熊本放送局 RKK TKU KKT KAB FM791 FMK  
公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>



指揮・ピアノ 若林 顕

Akira Wakabayashi

表面的な流行にとらわれず、常に音楽の本質に迫る演奏を信条とする若林顕は、ラフマニノフなどの作品には、ロマンティズム溢れる劇的な表現力を発揮し、ベートーヴェンやブラームスなどのドイツ音楽では、堅牢な構成と深層を衝くアプローチに定評がある。とりわけ、単なる音の美しさにとどまらない自在な音色表現、圧倒的な技巧は聴衆に強い印象を与えてやまないものであるが、ピアノ演奏芸術における更なる可能性への探究には常に余念がない。

2008年1月、突然襲われた重大な手疾患により、数多くのコンサートやレコーディングをキャンセル。演奏家生命の危機が懸念される事態に見舞われ、時には心身共に困難な状況下で演奏することを余儀なくされたが、治療の成果を得て2010年秋には完治。リスト編曲のベートーヴェン：交響曲 第9番のような超絶技巧を要する作品をも見事に演奏して“完全復活”。2012年にはヨーロッパ演奏旅行が予定されるなど、新たな飛躍が期待されている。

東京芸術大学で田村宏氏に、さらにザルツブルク・モーツァルテウムやベルリン芸術大学でハンス・ライグラフ氏らに学んだ若林は、1982年第51回日本音楽コンクールピアノ部門第2位。1985年、第37回ブゾーニ国際ピアノコンクール第2位入賞。さらに1987年には弱冠22歳でエリーザベト王妃国際コンクール第2位受賞の壮举を果たし、一躍脚光を浴びた。

その後、NHK交響楽団をはじめとする日本の主要なオーケストラや国内外の著名指揮者たちとの度々の共演や全国各地でのリサイタルなど、多忙な演奏活動を展開してきたが、2002年にニューヨーク・カーネギーホール（ワイル・リサイタル・ホール）で鮮烈なリサイタル・デビューを果たし、カナダ・トロントにおける Music Toronto Chamber Music Series やシカゴでのマイラヘス＝リサイタル・シリーズにて大成功を収めて再招聘されるほか、フランス・ナントにおける音楽祭『ラ・フォル・ジュルネ』、ストックホルムにおけるアモリナ・リサイタルシリーズなどにも出演。さらにベルリン交響楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、ロシア・ナショナル交響楽団、エーテポリ交響楽団、ノールショピング交響楽団、リンブルク交響楽団、パドゥルー管弦楽団、スコットランド室内管弦楽団等とも共演し、英国マンチェスターの「ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージック」でマスタークラスを行うなど、活動領域を着実に拡大している。

室内楽奏者としてもコリア・ブラッハー、ステイーブン・イッサーリス、堤剛、カール・ライスター、フランソワ・ルルー、ラデク・パボラク、ライブツィヒ弦楽四重奏団、ウィーン八重奏団など、内外の名手達と数多く共演して好評を博しており、さらにその延長として、弾き振りによる協奏曲演奏でも注目を集めている。

2007年秋には「ヴィルトゥオーゾ・プログラムによる3連続演奏会」と題したリサイタル・シリーズを東京にて開催、「…若林の音質、とりわけ音の色彩感覚における一層の深化が示されたリサイタルであった。…彼にとつてのテクニクとは、作品の内面を汲み取り、それを表現するための手段なのだ。…」などとして、絶賛を博した。

レコーディングはこれまでにデンオン、ライヴノーツ、オクタヴィアなどのレーベルからリリースしている。

1992年出光音楽賞、1998年モービル音楽奨励賞、2004年ホテルオークラ賞受賞。

現在、桐朋学園大学院大学教授、桐朋学園大学特任教授、国立音楽大学招聘教授。

(2011年2月現在)



写真提供：HYO

管弦楽 ザ・シンフォニエッタ

The Sinfonietta

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成（50人以下）の特性を活かした選曲、演奏活動をしている。

これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、岩村力、藤崎凡、久保田悠太香の各氏、ソリストでは安永徹（Vn）、堀正文（Vn）、篠崎史紀（Vn）、小野富士（Vla）、O. ボルヴィツキー（Vc）、小林道夫（Cemb）、若林顕（Pf）、合志知子（Pf）、吉田秀晃（Pf）、青柳晋（Pf）などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。

2006年3月の第20回記念演奏会では、山下一史氏、若林顕氏らと共演。同年9月には「スペシャルオリンピックス・チャリティコンサート」の特別編成オーケストラの一員として、指揮者小林研一郎氏と共演した。また小編成の特性を活かし、御船町、益城町、合志市、宇城市等の小中規模ホールでの演奏も行って来た。アマチュアでも時間をかけてひとつひとつの曲をじっくり丁寧に仕上げれば充実した演奏ができるという信念をもち、8～10ヶ月の間隔で演奏会を開いている。

ホールでの演奏会以外では、2004年11月にNHK-BS2の番組において熊本城前での演奏が全国に放映された。2008年よりNPO法人オーケストラ創造主催の「マロ塾」に参加し、篠崎史紀氏の指導を受ける様子を一般に公開、またSTREET ART-PLEX KUMAMOTOに参加し、熊本市中心市街地の商店街の中でフルオーケストラで交響曲を披露するなど、一般の方にもオーケストラに親しんでいただけるような活動にも取り組んでいる。

## 曲目解説にかえて ～若林さんを囲んでの座談会Ⅲ～

### ■プログラムについて

—— この3曲を選ばれたいきさつを教えてください。

若林さん：モーツァルトの27番というのは、特殊な透明感があって特にスペシャルなものを感じますので。古典曲から1つは選ぶという理由もありました。

シューマンのコンチェルトは非常に室内乐的で、楽団の人達に能動的に参加していただくことで、すばらしく活性化しえる要素がありますし、前からシューマンはこういう形（弾き振り※1）でやってみたかったというのがあります。

ブラームスは交響曲的な大がかりな曲なのでシンフォニーの代わりににもなりえるということで決めました。

### ■モーツァルト／ピアノ協奏曲第27番変ロ長調 K.595

—— この曲の特色についてお聞きしたいのですが。

若林さん：全体を通して安らぎがありますね。すごく清らかな感じ、静かな感じ、透明な感じ、そういうような印象を持ってます。

—— それはやっぱり最後のピアノコンチェルトということと関係がありますか？

若林さん：それは僕はちょっと分からないですけれども、でもまあ奇しくもそうなんですね。現実的な喜び悲しみというよりは、追憶的な雰囲気があるんですよ。ちょっとした遠さ、懐かしさというか…そういうようなものが全体を占めてるような気がしますね。

—— モーツァルトは割とシンプルで音の数も多くないと思うんですけど、その裏に書いてあることをどのように読み取るのですか？

若林さん：僕個人的なことですけどね、モーツァルトはそれこそ20代のころははっきり言うと興味がなくて、あんまりよく分からなかったんですね。まあ単純に言ったら結構つまらないなと思ってたんですよ。

——（一同笑い）

若林さん：綺麗ですよ、綺麗ですけど。「立派なものこういう風にかくあるべし」とすごく頑張ってたっていう部分があったわけですが、その呪縛が解かれたところから、急にモーツァルトがストレートに自分の言葉として近づいたような感じがあったんです。一番大事なのは、すごく音を大事にした感覚、慈しみの感覚。本当に感電するぐらいな感覚で音をひとつずつ並べていく。

—— 今日の練習で、出だしを何回かやっているうちに急激に変わっていきましてけれども、それはもう本当に、みんな一音、一音神経を使って…。

若林さん：要するに相互作用っていうのがあって、その波長がグルグル回ってくるというのがオーケストラのすばらしいところと思うんです、やっぱり。潜在的に影響しあえるんですね。すばらしいことだと思います。

### ■シューマン／ピアノ協奏曲イ短調 Op.54

—— この曲はととても惹きこまれますよね。何か次々と場面が展開されていって。シューマンのピアノコンチェルトはたった1曲しかないですけど、そこに凝縮されている魅力を教えてください。

若林さん：ファンタジーというか、情熱というか、苦しみというか、その矢継ぎ早に次々と出てくる展開力がすごい。憧れの念を追い求めて走り切る、そういう内なるエネルギーがすごい曲だと思いますね。

また、非常に即興的な面があって、即興的な感性において取り組んだ時に見えてくるものがたくさんあると個人的には思っています。だからその時その時どういう流れになるか、いろいろ自由があると思いますよね。

—— 3楽章には、拍子の取り方がとても難しい箇所があって、そこはオーケストラもこだわって何度も練習してきました。合わせるのに相当な苦労がありました。

若林さん：拍子のサブリミナル効果でね、隠し絵じゃないけど、結構どっちにでも（2拍子にも3拍子にも）見えるようなところで緊迫感を高めている。

—— シューマンは3拍子の使い方がうまいと思いますね。そして3楽章だけで1,000小節くらいあるのにあつという間に終わる。ファンタジーですね。ところでこの曲を指揮者なしでやると言ったら、プロの方が「無理」と。自分たちはピアノを聴かなくて指揮者だけ見てやっていると。

若林さん：それはもっと複雑にするパターンも多いかと僕は思います。この曲はととても室内乐的なのです。

—— ところで「ド/シ/ラ/ラ」から始まるメロディをドイツ語にすると「C/H/(L)A/(L)A」となって、この曲は愛妻クララへ宛てたラブレターとも言われてますよね。でもブラームスのピアノコンチェルト1番も、そのクララへの想いに揺れる時期に書かれたというから、シューマン、ブラームスと続くのはなかなか意味深い選曲ですね。(笑)

### ■ブラームス/ピアノ協奏曲第1番ニ短調 Op.15

—— ブラームスのピアノコンチェルト1番は、あんまり熊本の演奏会では聴いたことがないけど、でも愛好者は多くて“この曲が聴きたい”という方もおられます。もしかして熊本では初演?!

若林さん：かもしれませんね。

—— ところでこの曲は当時、あまりにも交響乐的な作りで、それまでにない形が最初は不評だったとか。※2

若林さん：最終的にはすごく自負を持った曲だったらしいですよ。それが不評だったんでブラームスはショックだった。

この曲で本当に説得力のある演奏というのは、かなり難しいかもしれません。どっちかっていうとオーケストラの曲を武骨にピアノ用に移したような音の使い方かなり朴訥<sup>ぼくたく</sup>としています。それだけにプレーヤーとしては非常に技が必要な曲で、難しい面がたくさんあると思います。

そしてこの曲は「苦しみ」というものがテーマになっていて、すごく「念」の力が必要だと思いますね。音に対する念力、楽想に対する念力。ニ短調というのは苦しみの調性ですから。

—— そうですね。ニ短調になるまでには65小節もあって、最初から不安定感がずっと続いています。

若林さん：最初のあの和音っていうのは(ニ短調では)ありえない和音ですから。だからすごい発想の自由ですよ、やっぱり。相当チャレンジ的なことを盛り込んでますよね。いきなりすごい和音から展開されるわけで。構図の大きい壮大な曲ですね。

—— 2楽章は祈りに満ちていますよね。

若林さん：そうですね。隠しきれない感情の起伏があるところが更にすばらしいところです。

—— でも2楽章と3楽章の落差が激しいですね。

若林さん：しかしまあ、モチーフとしては貫徹してますね。つながりがありますね。3楽章はある種の決断力というかね。

—— ブラームスのピアノコンチェルトには1番と2番しかないですが…。

若林さん：1番は“ピアノ付き交響曲”とかよく言われていて、2番の方は(ピアノとオケが)対等的と言われるんですよ、一般論としてね。でも実は2番の方がピアノがオーケストラに包含されてます。1番は割と実演(生演奏)でピアノがよく聴こえるコンチェルトでもある。そのところ、割と誤解があるのかなと思いますね。…ということ、演奏の仲間の中では言っているんですが。

### ■弾き振りについて

—— 今回で若林さんと3回目になる弾き振りでの演奏会ですが、若林さんは弾き振りをされてからどれくらい経つのですか?

若林さん：10年になります。これは指揮者になりたいとか言うことではなく、ピアノ(を演奏すること)に還元するためにやっています。弾き振りをするためにはアイデアや柔軟性が必要だし、経験を積んでいろんな要素を持ったパレットを大きくして、自分を開拓するためです。

—— 私達オーケストラにとっても、若林さんと弾き振りで演奏させていただくことによって、指揮者に頼らない能動的姿勢が求められ、すごく勉強になってると思います。普通、弾き振りでは到底演奏することのないようなブラームスを演奏するんですから!

若林さん：ブラームスのピアノコンチェルトは、試みとしてのチャレンジです。この曲を弾き振りすることで、指揮者がいて演奏する時よりも、緊張感やポジティブなエネルギーがオーケストラとピアノから更に出てくるような演奏をめざしたいです。

2011年9月4日「石松茶屋」にて

※1 ピアニストが指揮も兼ねる演奏スタイル

※2 ブラームスはヨアヒムに宛てて「僕はただわが道を行くだけです」と書き送ったが、悲しげに「それにつけても野次の多さよ」と付け加えている。「ウィキペディア」より



